

## 農業共済新聞 千葉版

掲載号	10 月 4 週号	
筆者	所属	農林総合研究センター
	職名及び氏名	研究員 小林 理
題名	赤ピーマンに適した品種と仕立て法	
備考	【表説明】 図1 主枝の仕立て本数が月別の可販収量に及ぼす影響 図2 主枝の仕立て本数別作業時間	

### 【本文】

一般に店頭で見かける緑色のピーマンは、開花後 30 日程度の未成熟果実です。「赤ピーマン」は、この緑色のピーマンを収穫せず、さらに 20～30 日、赤くなるまで成熟させた果実のことです。赤ピーマンはパプリカに比べ、果肉や果皮が薄く加熱調理がしやすいなどの性質から、中華料理店等に需要があります。県内の主要な作型は 3 月下旬から 4 月下旬に定植し、11 月頃まで収穫する半促成栽培です。

赤ピーマンの栽培に適する品種は、①果実の色が鮮やかであること、②出荷後に果実が軟化しないこと、③着果性が良いことが挙げられます。特に①と②は必須条件です。これまでの試験から「京鈴」（タキイ種苗）が適品種として選定されています。「京鈴」は着果性が良い反面、過剰着果によって草勢が低下しやすく、回復に時間を要します。ピーマンは適度に着果負担がかかった状態が最も生産性が高く、着果負担が少ない場合は枝葉だけが成長して整枝作業に労力がかかります。通常の緑ピーマンの栽培では着果負担のバランスが取りやすい主枝 4 本仕立てが主流です。一方、赤ピーマン栽培では、主枝 2 本仕立てが適しています。この仕立て方法は初期収量に優れ、収穫後期も収量を確保でき（図 1）、整枝作業労力も 4 本仕立てに比べ、ほとんど増大しません（図 2）。

半促成栽培ではベッド幅 80cm、通路幅 70cm、株間 30cm で定植し、生育の旺盛な主枝 2 本を誘引します。1 節に 2 果程度となるよう整枝し、主枝は 20 節を目安に摘心します。その後は徒長枝などを整枝します。同じ株から緑ピーマンと赤ピーマンを同時に収穫できますので、直売向けに栽培するのもお勧めです。

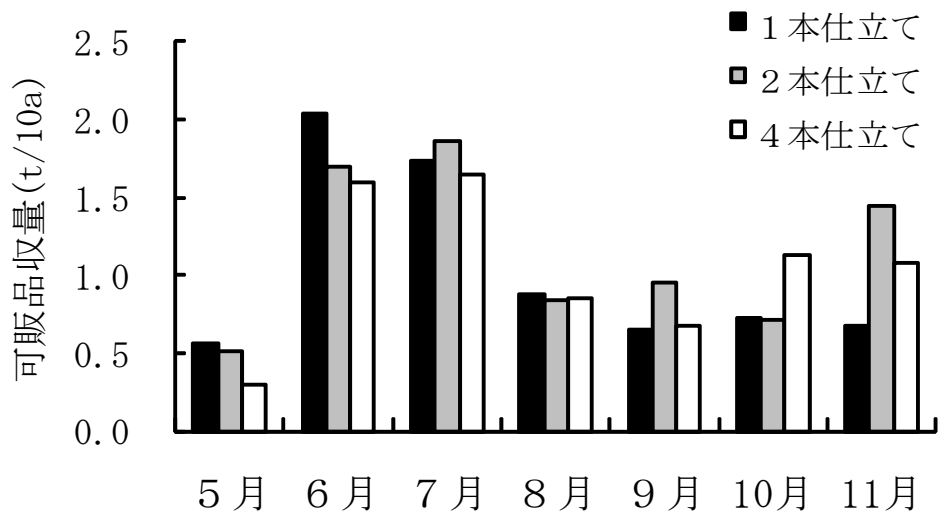


図1 主枝の仕立て本数が月別の可販品収量に及ぼす影響

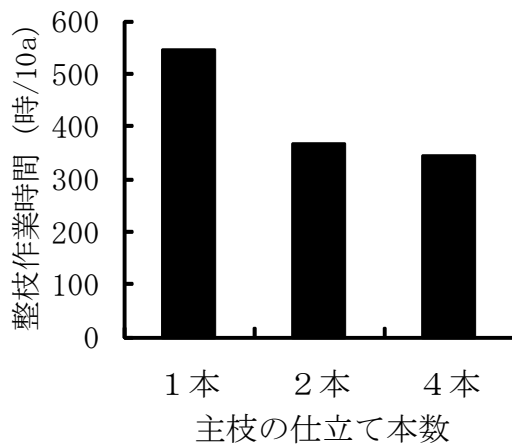


図2 主枝の仕立て本数別整枝作業時間

